

2026年度

国府台女子学院 中学部

推薦入試基礎学力調査

国語 (40分)

【注意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 汚れを落とすためにヤクエキを塗る。
- ② サンサンゴゴ集まる。
- ③ 確かなジツセキのある会社を信頼する。
- ④ コーチが強い言葉でハツパをかける。
- ⑤ CGで未来都市を具現化する。

問二 実力が同じくらいで戦うのにちょうどよい相手のことを「ライバル」といいますが、これを漢字で書くと「□敵手」となります。□にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問三 次の敬語を使った表現について、正しければ○を、間違っていれば正しく全文を書き直しなさい。

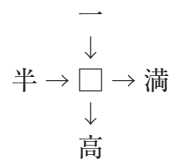
お求めになりやすいお値段です。

問四 次の——線部ア、イのうちどちらの言葉が正しいか。正しいほうを選び、記号で答えなさい。

- ア 彼はしかめつらしい顔つきで対応した。
- イ 彼はしかつめらしい顔つきで対応した。

問五 矢印の方向に読んで二字熟語になるように、□にあてはまる漢字一字

を答えなさい。



問六 次の()に共通して入る身体の部位を表す語を漢字一字で答えなさい。

- ()を打つ
- ()を入れる
- ()を抜く
- ()を染める

問七 「危険」「経験が浅い」「子どもっぽい」「情熱」のようなイメージを持つ色を漢字一字で答えなさい。

問八 次の文章を読んで、☆印のあとの問いに答えなさい。

オーケストラ部では、指揮者も行う新たな部長を決めることになりました。今回の候補にあがっているのが、Aさん、Bさん、Cさんの三名で、実力的に大差はありません。この三名が担当する楽器や指揮者としての経験年数、および周囲の生徒からの評判を三名それぞれ一つずつ取り上げることにし、次のように掲げていききたいと思います。

- 周囲の生徒が「部活の仲間から最も人気だ」と認めている生徒は、指揮者としての経験が一番長い。
- 三名のうち、指揮者としての経験が一年間の生徒や三年間の生徒もい

るが、それはAさんではない。

●周囲の生徒から「その三人の中で絶対音感があるのはこの人だけ」と思われている生徒がいる。

●トランペットを担当している生徒がいるが、指揮者としての経験は二年間の生徒とは異なる。

●「親がプロの演奏家だ」と周囲の生徒が認めている生徒は、ヴァイオリンを担当している生徒ではない。

●フルートを担当している生徒は指揮者としての経験は長い、Bさんではない。

☆右の内容を判断し、「周囲の生徒から『その三人の中で絶対音感があるのはこの人だけ』と思われている生徒」を部長にしたいと思います。

1 この生徒はAさん、Bさん、Cさんのうち誰ですか。また、その生徒の、2 指揮者としての経験年数（漢数字で）、3 担当する楽器も答えなさい。

問九 「おずおずと」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

問十 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

驚くべきことに、私は地下鉄メトロに乗っていた。

いや別に、メトロに乗っていること自体に驚おどろいているわけじゃない。私のとなりの席に座っている人物が、どうやらほんとうにポスト印象派を代表する画家、エミール・ベルナルであること、そのエミールと一緒に二十世紀のいま、パリのメトロ七号線に乗っている——という信じがたい事実①に驚おどろいているのである。

エミール・ベルナル。一八六八年、フランス・リールで生まれ、十六歳でアカデミーの画家、フェルナン・コルモンの画塾がじゆくに入門。そこでフィンセント・ファン・ゴッホやアンリ・ド・トゥールーズ・ロートレックと出会い、親交を深める。その後、彼にとつての運命の地、ボン・タヴェンに出向き、のちに「ボン・タヴェン派」と呼ばれるようになるポスト印象派いんしょうはの中核ちゆうかくを成す一派の主要人物となるわけだが……。まさか、そのエミールが時空を超えて現代に、しかも私のところへ迷い込んでくるとは。

おそらく私は妙みょうにリアルな夢を見ているのか、あるいは、いままさにパリの書齋しよさで書いている真つ最中の〈ポスト印象派の物語〉の世界の中へと私のほうが迷い込んでしまったのか……。そのところは定かではないのだが、ともかくにも、エミール・ベルナルとつるんで出かけるなんて、夢なら覚②めないでほしいし、小説なら終わらないでほしいと願ねがいながら、私はメトロに揺ゆられていた。

日本の美術を愛する仲間を紹介する——とエミールは私に言った。誘いざなわれるままに私はエミールについていくことにした。まずはモンマルトル界隈かいわいにあるルピック通りのアパルトマンに住む友人を紹介する、と言われたので、私は前のめりになった。

「それが誰か知っていますよ。その画家は、画商をやっている弟と一緒に住んでいるでしょう？」

おや、とエミールは目を丸くした。

「よくご存じで。ぜんっぜん、誰も知らない無名の画家なんです……」

「いやいや、いや。ところがどっこい、私は違うんです。もつといろいろ、知っていますよ」

③ まるで予言者のごとくちよつとだけ尊大な気分になって、私は続けた。

「彼はオランダ人で、ちよつとへんくつなところがある。最初は結構暗い色調の絵を描いていた。しかし、画商のやり手支配人を務める弟を頼ってパリに出てきてから、画風が劇的に変わった。浮世絵が大好きで、熱心に研究している。そして異様なほど筆まめである……」

エミールはいよいよ目をまん丸にして、

「こいつはすごい。実は知り合いなのでは？」

「知り合いではありませんね、残念ながら」と私は正直に答えた。

「私はあちらを大変よく知っています（そう、自分の小説の主人公として書いたくらいだから）。しかしあちらは私をご存じないのです。会ったこともありません。でも、無理を承知で、一度会ってみたいものだ、ずっと願っていました」

「マジで？」とエミールは、どこでシユウトクしたのか、いまどきの若者言葉で応えた。

「マジです」と私は秒で返した。「マジでバねえ……いや、ほんとうに心底うれしいです」

というようなやり取りがあったのち、私たちはメトロを乗り継ぎ、アベス駅で下車して、緩やかな上り坂をルピック通りまで歩いて行った。

カフェで出会ったエミールは、口ひげと顎ひげを蓄えた青年だったが、ア

ベス駅の改札を出たところで振り向くと、つややかな栗色の髪をさりげなく七三に分けて、髭のない血色の良い若々しい顔立ちをした彼がそこにいたので、思わず二度見してしまった。⑤ 見覚えのあるその顔は、ロートレック

が描いた《エミール・ベルナルの肖像》そのもので、なかなかのイケメンだ。

エミールは、オランダからベルギーを経由してパリへ出てきたフィンセント・ファン・ゴッホと一八八六年に出会った。ということ、このエミールは十八、十九歳。いまから訪れるフィンセントは一八五三年生まれだから、

⑥ ① 歳……ということか。

ルピック通り54番地のアパルトマン、表通りに面した入口のペンキの剥けた青いドアの前に到着した私は、にわかに緊張してきた。アラサーのファン・ゴッホ、いったいどんな人なんだろう。

エミールは、ドア横に設置されているセキュリティロックのキーに慣れた手つきでピピピとタッチして解錠し、ドアを押し開けた。どの時代の若者であれ、やはり若者というのはこういうことに慣れているものなんだろうか。

狭いコートヤードを抜けて奥の建物にたどり着く。フィンセントとテオ、ファン・ゴッホ兄弟の暮らしぶりやいかに。

螺旋階段をぐるぐるとめまいがするほど回りながら上がっていく。何階まで上がったのか定かではなかったが、小さなドアの前でエミールが立ち止まった。トトトン、と忙しくノックすると、ややあって、ガチャリとドアが開いた。

ドアの向こうから現れたのは――すでに薄くなっている赤毛を撫でつけ、痩せこけた頬は赤い髭に覆われ、どんよりと曇った眼差し男……。

「やあ、フィンセント」とエミールは、自分の倍近く年上のその男に親しげにあいさつした。

「よかった、いてくれて。今日は、君に紹介したい人がいてね。連れてきた

んだよ」

⑦ 冬空のように冷たい青い瞳が、エミールの背後にいる私を射抜いた。私はいよいよ夢じゃないかと、自分の頬をビシヤリと引っぱらいた。

——ああ、確かに、たしかに。この顔。もう何百回となく、画集で、ネット、美術館で眺め続けてきた自画像のそのまんま。歳のわりにはけっこうな老け顔。間違いなく、この人こそは……フィンセント・ファン・ゴッホだ！

「あ、は、は、はじめまして。お、お目にかかれて、う、うれしいです」
私はつつかえながらどうにか言葉を押し出した。握手したほうがいいかなと恐る恐る右手を差し出した。——ところが。

「誰を紹介するって？誰もいないじゃないか」

⑧ まるで透視でもするかのような目つきに変わって、フィンセントが言った。えええつ。——まさか。まさかの既読スルー？じゃなくて、フィンセントには私の姿がまったく見えていないようだ。

エミールは振り向くと、その場に固まってしまっている私に向かって軽く片目をつぶった。それから、明るい声で、

「や、失敬。途中ではぐれてしまったみたいだ」

⑨ と言った。私はとつさにエミールの背後霊になりますます決心をして、彼の背中にびたりと寄り添い、部屋の中へと入っていった。

テレピン油の匂いがツンと鼻腔を刺してくる。室内には色とりどりのカンヴァスがところ狭しと置かれていた。壁には二段、三段とタブローが隙間なく掛けられていて、私はたちまち目を奪われた。激しい筆触、色彩の奔流——パリに出てきてから劇的に変貌を遂げた、まさしくこれぞフィンセント・ファン・ゴッホの絵画。嵐のように激しくも楽園のごとく華やかな、あのタブローの数々だ。

⑩ 「——わあ！」と私は思わず叫んで、あわてて口に手を当てた。が、フィン

セントの耳にはまったく聴こえていないようだ。そして、ああ、彼の耳は——このあと彼は南仏・アルルに赴いて、そこで自分の片耳を切り落とすという痛ましい事件を起こすのだ——両方ともちゃんとあるべきところにくっついていていた。

「この前、テオが面白い絵をみつけたと言って、買ってきたんだ」

そう言うって、フィンセントは重ねて立て掛けられているカンヴァス群の一角から、一枚のタブローを引き抜いて、私に——ではなく、エミールに見せた。

その絵は、不思議な磁力を放っていた。マンゴーの畑に集って大地の恵みの収穫に勤しむ褐色の肌の女たち。たつぷりとした鮮やかな色の服をまとった彼女たちは後ろ向きか横向きで、正面を向いてポーズをとるものはいない。足元には眩しいほどの緑の下草が広がっている。どこか遠い異国、夏の日

ひととき。明らかに浮世絵の影響を受けたコウズと色合い。この作品は——。あつ、と声を上げたのは、私——ではなく、エミールのほうだった。

「ゴーギャン。ポール・ゴーギャンの絵だろう？」

エミールが興奮気味に言った。

「知っているのか、この画家を？」

フィンセントが驚いて訊き返した。

エミールはタブローを両手で掲げて顔を近づけ、隅々まで舐め回すようにじつくりと見て、

「一昨年の夏、ボン・タヴエンにしばらくいたんだけど。そのとき、シユフネッケルに『ものすごく変わった絵を描くやつがいる』って紹介されて、会



ポール・ゴーギャン
《マルティニーク、マンゴーの木々》

話はできなかった。でも……」

エミールは顔を上げて、きっぱり言った。

「すごい絵を描く画家だと思ったよ。きっとこの人は、印象派の次にくる何かを生み出すに違いないって」

フィンセントは、黙^{だま}ってひとつ、深くうなずいた。

私もまた、フィンセントにドウキして、ひとつ、うなずいた。

フィンセントと（一方的な）対面を果たしてから、まだ十分と経っていない。それなのに、私は、なんだか胸がいっぱいになってしまった。【⑩】
ような、苦しいような何かが胸に込み上げてきた。

それぞれの画家を待ち受けている運命を私は知っている。彼らの未来を知っている。

彼らがアートの革命家になること、もがき苦しみながらも闘^{たたか}い続けること、過酷^{かこく}な人生の結末が待ち受けていること。ずっとあとになって、世界中の人々に愛されるようになること。

印象派を追いかけて、印象派を超えていくこと。

だから、私は、ただただうなずくことしかできなかった。

（原田マハ『原田マハのポスト印象派物語』より「ゴッホの物語」新潮社）

注釈

※ タブロー……絵画。

1 —— 線部 a k e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

2 —— 線部①「驚いている」とありますが、その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地下鉄に乗っていたこと。

イ ベルナルが時空を超えて現れたこと。

ウ ゴッホの作品を見られたこと。

エ 自分が夢を見ていることに気づいたこと。

3 —— 線部②「夢なら覚めないでほしいし、小説なら終わらないでほしい」と願っていますが、ここから読みとれる語り手の心情として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 非日常的な体験に戸惑^{とま}い、早く現実に戻りたいと思っている。

イ 時空を超えた出会いを貴重な体験として楽しみたいと思っている。

ウ 小説の題材に困っているのので、夢のような出来事を利用しようとしている。

エ ベルナルに対して不信任を抱き、危険を避けようとしている。

4 —— 線部③「まるで予言者のごとくちょっとだけ尊大な気分になって」とあるのは、どのような理由からですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゴッホと直接の知り合いであると勘違^{かんちが}いされたことがうれしかったから。

イ ベルナルに頼^{たよ}らなくても自分ひとりでバリを歩ける自信があったから。

ウ ゴッホについて未来の出来事まで知っているため、相手より優れていると感じたから。

エ ベルナルの話がすでに本で読んでしまっ^たって退屈^{たいくつ}を感じたから。

5 — 線部④「筆まめ」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆や文房具を丁寧に扱い、きれいに保存していること。
- イ 字を書くのが遅く、文章を仕上げるのに時間がかかること。
- ウ 字や絵がとでも達筆であり、見栄えよく仕上げられること。
- エ 手紙や文章を書くことを習慣としており、人に便りをよく送ること。

6 — 線部⑤「見覚えのあるその顔は、ロートレックが描いた《エミール・ベルナールの肖像》そのもので」とありますが、この表現から読み取れることとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 語り手は日頃からベルナールの顔をインターネットで調べていた。
- イ ベルナールの容姿が絵画のイメージと一致しており、現実味を増していた。
- ウ ロートレックの絵は空想の産物であり、実在の人物とは異なっていた。
- エ ベルナールはロートレックの弟子であり、顔立ちまで似せていた。

7 【⑥】に入る数字として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 十三、十四
- イ 二十三、二十四
- ウ 三十三、三十四
- エ 四十三、四十四

8 — 線部⑦「冬空のように冷たい青い瞳」という表現から読み取れる、

ゴッホの印象として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人懐っこく温かみのある人物で、周囲を安心させるような雰囲気をもっている。
- イ 距離感や厳しさを感じさせる人物で、近寄りがたい印象を与えている。
- ウ 未来を見通すような鋭さをもち、強い自信と威厳にあふれている。
- エ 弱々しく影の薄い存在で、人に気づかれにくいほど頼りない印象である。

9 — 線部⑧「透視でもするかなのような目つき」という表現は、どのような意味で使われていますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人の心や存在を見抜くように鋭い。
- イ 遠くの景色をはっきりと見通す。
- ウ 人の未来を予言できる。
- エ 目が悪く、見えにくい。

10 — 線部⑨「私はとっさにエミールの背後霊になりますます決心をして」という表現は、語り手のどのような気持ちを表していますか。本文の内容に即して最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 未来を知る自分の立場をあえて隠し、傍観者として静かに成り行きを見届けようとする冷静な気持ち。

イ 憧れあこがのゴッホとついに会えた喜びを大げさに表現し、幽霊のようにでも側にいたいと願う気持ち。

ウ ベルナルに強く依存いぞんし、彼の後ろに隠れることで守られたいと感じる、弱々しく消極的な気持ち。

エ 自分の存在がゴッホに見えていないと気づき、どうにかその場に居続けるために必死で身を隠そうとする気持ち。

11 — 線部⑩「——わあ！」と叫んでしまった場面で、語り手はどのような気持ちになったのか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゴッホの絵が予想外に暗く、不安になった。

イ 激しい筆づかいと色彩に圧倒され、感動した。

ウ ゴッホが自分を認めてくれたと喜んだ。

エ 部屋の匂いにおに驚いて、叫んでしまった。

12 — ⑪に入る最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強い イ 重い ウ 熱い エ 甘い

13 — 線部⑫「ただただうなずくことしかできなかった」とあるのはなぜか。本文の内容をふまえて最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゴッホに話しかける勇気がなく、言葉が出なかったから。

イ ゴッホの未来の悲劇と栄光を知っており、胸がいつばいになったから。

ウ ゴーギャンの絵の価値を理解できず、戸惑ったから。

14 本文の語り手は、ゴッホやゴーギャンなどの「未来」を知っています。

その「未来」を知る立場だからこそ、語り手の心にはどのような思いが生まれたと考えられますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選びなさい。

ア 自分だけが未来を知っているという特別な立場に満足し、彼らに優越感を覚えて得意になった。

イ 彼らの運命を知っているのは自分だけであり、その未来を変える使命を背負っていると強く思い込んだ。

ウ 未来の成功を知らせて励ほげましてあげたいのにそれができず、もどかしさや悔くやしさがこみあげてきた。

エ 彼らが苦難の末に悲劇的な最期さいごを迎えること、しかし後に世界に愛されることを知り、胸がいつばいになり言葉を失った。

15 本文の内容と照らし合わせ、次の人物と正しく結びつくものをあとのア～オから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① エミール・ベルナル

② フィンセント・ファン・ゴッホ

③ ポール・ゴーギャン

ア 浮世絵の影響を受けた収穫の情景を描いた。

イ パリに出てきてから色彩豊かな画風に変化した。

ウ 日本美術を最初にヨーロッパへ紹介した中心人物であった。

エ 弟の画商として活躍し、多くの画家を支えた。

オ ポンリタヴェン派の中心的な人物となった。

エ 語り手が実は現代の研究者であり、自分の知識を見せていること。

16 次の会話は、この小説を読んだ二人の中学生のやり取りです。()

に入る発言として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選び記号で答えなさい。

A 「この小説って、ただ昔の画家のことを説明してるわけじゃないんだね。」

B 「うん。地下鉄でベルナールと出会ったり、ゴッホの部屋に行ったりする場面って、すごく不思議だった。」

A 「たしかに。しかも語り手は、彼らの未来がどうなるのかも知ってるんだよね。」

B 「そうそう。だからこそ、ゴッホの姿を見て胸がいっぱいになったんだと思う。」

A 「なるほど。でも結局、この小説全体を通して作者が一番伝えたかったのは何なんだろう?」

B 「たぶん()ってことじゃないかな。」

ア 事実より空想を楽しむところが芸術を味わう一番の方法であること。

イ 過去の画家たちが新しい表現を模索し、後に世界へ大きな影響を残す存在であること。

ウ ゴッホやゴーギャンの私生活を細かく調べれば、芸術の秘密がすべてわかること。

